

児童健全育成賞（数納賞）佳作

避難所としての児童館活用

新潟県燕市

燕市小中川児童館 館長 大橋 美樹

1. 身近で起こる災害

燕市にも、避難勧告が出た。令和元年10月12日の台風19号で、大河津分水が決壊まであと一步という事態となった。信濃川上流で降った大雨は、大河津分水をも飲み込む勢いで観測史上最高水位の17.06mを記録した。これは、堤防まで約1.5mの高さしかない。これまでの最高記録、昭和57年の16.23mを上回った。写真で見ると、ちょっと揺れただけでお椀の縁から水がこぼれるように、川が決壊しそうである。小中川児童館には、避難勧告が出た分水地区在住の職員がいる。「避難所に行ってみたが満員だったので、自宅の2階に避難するべく、大事な物を2階に上げる」との連絡が入った。災害は本当にどこにでも起こりうる、と感じさせられるものだった。燕市は、河川管理者や気象庁などと協議した上で、区域を限定して避難勧告を発令し、8カ所の避難所を開設した。ピーク時は、約1100人が避難したとのことである。大河津分水は、令和4年に通水100年を迎える。治水工事を怠らなかった先人たちに感謝すると共に、現在も令和14年度の完成を目指し、大規模な改修事業が進んでいるので、それまで、今回よりも大きな大水が起こらないで欲しいと切に願った。

日本各地で大規模災害が起きている。どのようにしたら、災害時に子どもの命を守れるのか。児童クラブ設立後（平成11年）だけでも、中

越地震（平成16年）、中越沖地震（平成19年）、東日本大震災（平成23年）、台風19号（令和元年）と、燕市にも大きな災害が起きている。施設としては、直接の被害が無かったのを幸い、大きな災害が起こる都度、子どもたちへの安全対策を見直して来た。特に、児童クラブ単体から児童館に変わって以降（平成21年）に起こった東日本大震災は、私の中で災害対策を考える上で大きなターニングポイントとなった。

2. 東日本大震災での対応と地域との関わり

まず、この災害を振り返ってみたい。平成23年3月11日に東日本大震災で振れが起きた時、子どもたちは学校からの下校途上だった。小中川児童館は、学校から児童館まで、1年生の歩く早さで、概ね17分もかかる。しかも、途中から住宅が無く、一面の田んぼの中を通って来る。揺れた時、子どもたちは正に田んぼの中にいて、倒れて来る物が無い代わりに、頼りになる大人も誰一人いない状態だった。揺れが収まった後、職員は田んぼの中まで子どもたちを迎えに行き、児童クラブに在籍している子だけでなく、一緒に帰って来ていた地域の子もランドセルのまま児童館に呼び入れた。地域の子については、学校に電話を入れ、保護者と連絡を取ってもらい、大人が家にいることが確認できた子は、児童館まで迎えに来てもらった。下

の子の病院等で、委ねられる大人がすぐに来られない子については、児童クラブ在籍児童と共に大人が迎えに来るまで預かった。燕市の児童クラブは月6000円の利用料と2000円の間食費がかかる（減免措置あり）。通常ならば、在籍している児童と、児童館への自由来館の児童に対して、児童の預かり等、同一のサービスはできない。しかし、災害時は違う。私たちは地域の子も預かることを当然と考えたし、当たり前なことながら、児童クラブ在籍児童の保護者からの苦情も無かった。

この時の対応があり、災害対応での連携を地域に呼びかけることができるようになった。平成21年3月1日、それまで児童クラブ単体だった施設を児童クラブ併設児童館とした。地域と関わりたくて児童館化したものの、最初のうちは、クラブ児童以外の子に利用してもらうことさえ難しいと感じた。まつり等、楽しいイベントを催し、参加してもらうことで精一杯であった。もっと、日常から地域と関われないかと暗中模索していた。地域との関わりを考える中で、災害対応ならば、地域と無理なく関われるのではないかと思った。地震時の対応が決め手となり、児童クラブに子どもを預けていない家庭に対しても、「災害時には、地域の子は誰でも守ります。だからこそ、日頃からの地域との連携が欲しいのです」と言えた。児童館設立時に避難所指定となったことも幸いし、「いざとなったら児童館へ逃げて来てください」と地域に呼びかけることができ、地域と共に災害対応を考えるきっかけとなった。

3. 「自分の命は自分で守る」には

東日本大震災時後、群馬大学の片田敏孝教授（災害社会工学）の講演を聴いた。片田教授は、釜石の奇跡と呼ばれる児童の避難行動を、8年に渡って指導してきたとされている。講演の中で、釜石の「津波てんでんこ」を知った。これは、津波が来たら、家族の安否よりもまず、自分が高台に走って自分の安全を確保すること。子どもがそういう行動がとれると信じているか

ら、家族も真っ直ぐ山を目指し、結果として家族全員が無事となる。さらに、最初に避難行動を取ることで、他の人の避難行動も促すことになる。万一、逃げ遅れて亡くなる家族が出たとしても、各自で逃げる約束だったということが残された家族の心の傷が小さくなる。と、いう釜石地域の教えだとのこと。これは、釜石だけではなく、全国どこでも伝えて行かなければならない災害時の教えではないか。そこで、目の前の子どもたちが「自分の命は自分で守る」ようにするにはと考え、児童館等から避難所まで子どもが行く、疑似避難体験を行うことにした。

平成24年10月20日に「めざせ！西小体育館どきどき冒険避難ウォーク」と題し、どんどこプロジェクトとして、「にいがた災害ボランティアネットワーク」を協働NP0とし、活動を行った。どんどこプロジェクトは、児童館とNP0の協働事業で、一般財団法人 住友生命福祉文化財団が協賛となり、活動費用を負担してくれる。そして、費用面の補填も非常にありがたいが、さらに、防災等、専門性が必要な活動、児童館職員だけでは十分な知識や経験が無い活動をした場合、主催者である、特定非営利活動法人日本NP0センターが、その道が専門のNP0団体を紹介してくれて、一緒に活動することができる。大規模活動となり、専門性が必要な防災関係の活動は、どんどこプロジェクトでないと実施できないものであった。

この時、白山町児童館が主体となり、白山町児童館、秋葉町児童クラブ、西燕児童館を起点として、避難所である燕西小学校体育館までたどり着く内容だ。小中川児童館は、運営スタッフとして加わった。もしも1人でいるときに災害が起こったら、自分で判断して行動できることが大切だということを「避難ウォーク」として体験させた。西小学校の子どもたちの広域の活動にし、1人で行動している時でも、災害時自分で判断し行動できるような避難訓練とした。

自治会長や社会福祉協議会といった協力者と共に事前ミーティングを開いた時に、「防災活動を前面に出すと、子どもが主体的に参加して

くれない」との指摘があった。「保護者は内容が良ければ参加させようとするが、子どもはおもしろい、と思わないと自ら参加することはない」と。楽しませる仕掛けをして、わくわくしながらいつのまにか災害時に命を守る行動ができるようになった、というのが理想の活動だと結論になる。企画名も工夫し、呼び込んだ子どもが楽しくなるアイデアを随所に盛り込んだ。何より設定をゲーム仕立てにすることにし、勇者である子どもたちが色々な障害を乗り越えて安住の地に辿りつくというファンタジー仕立てとした。当日、出発する子どもたちに王様に扮した李仁鉄さん（NPO法人 いがた災害ボランティアネットワークメンバー）から、挑戦状なるものを手渡され、そして無事に避難所にたどりつく為の力も与えられ、子どもたちはこれから、何が始まるのだろうと、目を輝かせながら出かけて行った。王様役の李さんが隠れたる名優で、100均で購入した剣をそれっぽく飾り立て、すらっと抜いて子どもの肩に乗せ、「汝、勇者よ、今、力を授ける」と演じた時の子どものわくわくした顔が、これからの冒険を楽しみにしていると物語っていた。途中、要介護者に扮した職員を助けたり、予定した道が通れないアクシデントに立ち向かったりと、いくつかのミッションを用意した。さらに、終了時には、無事に避難できたことをたたえる巻物が手渡され、子どもにとってはゲームの中の主人公になったような活動だった。

この活動を通して、子どもたちは冒険しながら主体的に行動することを学んだ。それと同時に支える大人たちが、協働して活動するとはどんなことか知った。王様役を演じた李さんから「それぞれが異なるノウハウ（資源）で、同じ目標に向けて取り組みをするのが協働だとすれば、今回がまさにそうであったと言えると思います。児童館サイドの子どもの興味関心を引きつける工夫や集中力を保つ工夫、作成物の表現の仕方、子ども達にどう育てて欲しいのかという明確なビジョンは、まさに目から鱗でした」との言葉があった。同時に、燕市防災課の職員

は活動終了後の挨拶の中で「こんなに大勢の人を関わらせた活動をやって大丈夫かと心配していたが、NPO恐るべし。見事でした」と語った。それぞれが自分の持ち分を全うし、異なる専門性を持つ人への畏敬の念を抱く活動であった。

4. 避難所生活を体験しよう

①配慮が必要な家庭の為の避難所を設定する。

「自分の命は自分で守る」と、避難所まで行く体験と共に、避難所生活を疑似体験しよう、ということで、同年10月6日、小中川児童館で「避難所生活を体験しよう」、という活動を行った。白山町児童館の「どきどき冒険ウォーク」と相互乗り入れの形で運営し、燕市全体として避難所までの避難と避難所での生活、二つの企画を実施した。

児童館が創設された時、目の前に小中川公民館という地域に浸透した避難所があるにも関わらず、避難所指定となり、始めは困惑した。地域の人は避難するとなると、まず、公民館に行く。児童館が避難所指定されようと、実際には誰も来ない。避難者の来ない避難所指定の意味があるのかと訝ったのだ。しかし、中越地震の後、被害が大きかった長岡で活動している「長岡子育てライン三尺玉ネット」代表、佐竹直子さんから「幼い子を抱えて避難所へ行けず、自宅の玄関前で生活した」との話を聞き、通常ではない避難所運営の可能性があると気付いた。私には、避難所というと体育館に地域の人々がわざわざ集まるステレオタイプの避難所のイメージしかなかったのだと思う。せっかくの機会なので普通の避難所では居心地が悪い人、何等かの配慮が必要な人を集める避難所と仮定し、避難所運営をやってみようと思った。

燕北中学校の野球部に協力を依頼し、部全体で参加してもらった。部員の一人が東日本大震災の為、福島から避難してきた子で、他人事ではない、という事情があった。活動では、10軒の疑似家族を作り、それぞれの家族に①赤ちゃんがいる家庭、②大人が全員仕事に行っていて、中学生のお兄ちゃんと妹、弟しかいない家庭、

③おかあさんが外国人で日本語がほとんど理解できない家庭、④お父さんが全盲で、盲導犬と共に避難してきた家庭、等々、通常の避難所では生活しにくいと思われる条件を付けた。

避難所体験活動を始めると、家族の場所取りから揉めた。先に来た家族がその家族にとって都合の良い場所に落ちてしまい、出遅れた家族が、足が悪いのにトイレが遠い等、生活に不自由な場所となった。これは予想し、ある意味仕込んでいた事態だったので、全家族が揃い、満員となった所で、調整役の李さんが「ちょっと待って」と割って入り、理由を説明しながら場所割りを行った。実際の避難所で何度も似たような活動をしている人が持つ、温かで、共感力に富みながらも、だからこそ、ここに集まった全ての家族が安心できる場を作ろうという使命感に満ちた仕切りだった。その後も、炊き出しのご飯が届いた、段ボールが大量に届いた、すぐに食べられる食料が運び込まれた、と物資搬入の度に、出遅れる家庭と素早く対応できる家庭で得られるものに差が出てきた。すると、自発的に出遅れ家庭を助ける動きが出て、避難所全体が運命共同体の様になってきた。李さんが場所割りをした時、上手にそれぞれの家族の配慮すべき点を公表し、お互い気を配る環境を作った伏線があったと思う。

実際の避難となった時に設営する立場となる自治会長さんやまちづくり協議会の代表者から、「こうすればいいのかというヒントをもらった。得難い体験だった」との言葉があった。避難所運営の中で、場所割りが大事で、皆が勝手に陣地取りをすると、その集団の中で強い人が言い分を通し、結局締め出されたり、居心地の悪い思いをしたりする人が出る、ということがわかり、運営する側の最初の設営が避難所の居心地を大きく左右することが体験できた。他にも、疑似体験を通して、普段から避難所に持って行く物について考えたり、用意したりすることができた。

参加してくれた中学生からは、活動後アンケートの中で「おかあさんが、日本語ができない人

の設定で、弟たちもいて、どうしたら良いかわからなかった。親切なお隣の人が声を掛けてくれてご飯とかも一緒に作ってくれてすごく助かった。本当に避難することがあったら、僕も困っている人に声を掛けてあげたい（中2男子）」「いざ、自分が避難する立場になったら、今回経験したことが役に立つと思います。避難場所には様々な人が来るため、自分よりも大変な人を思いやる気持ちを体験できて良いと思いました（中3女子）」との記載があった。

②地域の人を助ける。

（「避難所生活を体験しよう! VOL. 2」）

初回の疑似避難所生活の時、白山町児童館の活動と相互乗り入れとなったので致し方無いものの、小中川地区でも地域に出て行く活動がしたい、との声があった。そこで、平成25年11月16日、「児童館に避難し、落ち着いた後で、子どもたちが地域を回って食料を集めたり、安否確認をしたりする」という設定での活動を行った。小中川地区は地場産業のある農村地帯で、親世代が就労し、祖父母世代が稲作し、家の周りに自分の家で食べる野菜を作る家庭がたくさんあった。また、実際の被災時を考えた時、外で働く両親は留守で、年寄りと小学生のみ家に残る、という事態が一番ありそうだった。動ける子どもがお年寄りの知恵を借りつつ避難する、という設定が地域事情に合っていた。

当日は食生活改善推進委員協議会の方に調理をお願いし、子どもたちが地域から集めた食材を届けて調理してもらう、との設定にした。また、食べるものを集める中、自力では避難できない地域の人を避難所である小中川児童館にお互いに協力して連れてくる、とのミッションもあった。車椅子でないと移動できないのに、道路ががたがたで単独では動けない人、地震の時、落ちてきた物で怪我をして動けない人、等を地域に配置し、食材を集める子どもたちが彼らを助け、児童館に連れて来ることとなる。どこどこプロジェクトとして申請し、協働相手として「公益財団法人 中越防災安全推進機構 地域防災センター」をお願いした。

初回の「楽しい避難体験」を参考に、ボーサイダーという防災キャラクターに登場してもらい、導入を工夫した。特に低学年の子どもたちには大人気であった。また、地域の方と打ち合わせをする中で、この地区は、集落ごとに集会所があり、何かあるとそこに集まる習慣になっていると教わった。怪我人を配置する協力家庭を求める中で、その情報があり、怪我人は集会所に配置することになった。自力で動けるようならば、まず、集会所に行く。地域の人も、安否確認の際、まず、集会所から見る、とのことだった。また、地域を回る中で、子どもたちが独立した家庭の主婦から、「学童（放課後児童クラブの小中川地区の呼び名）に集まる子どもたちを見て、ずっと何かしてあげたかったのだけれど、変なことをして失礼になっても困るし、ずっとどうしたら良いか迷っていた。児童館になって、こうやって声を掛けてもらって、やっとお役に立てることが嬉しい。地域の子どもを見守ることが生きがいです」との言葉をもらった。地域には、子どもが好きで地域の宝と思って支えたい人がいるのだと気付いた。この活動を機に、地域の方に色々なことを頼むのは、悪いことではなく、一緒に地域の子どもを育ててもらうつもりで、お願いすれば良いと考えるようになった。児童クラブ単体時代に課題であった、一人親家庭では手が回らない体験活動を、地域の方の力を借りて行っている。年度末の進級を祝う餅つきや地域探検の先導役等、すっかり定番となっている、地域の人との関わりの中で実施する行事が、この時期に生まれた。

また、地域との関わりを考える中で、子どもは何かあったら児童館に行く。地域の大人は子どもの安否を知りたかったら、児童館に問い合わせる、という釜石にとっての山の様な存在に、児童館が少しずつなっていくのを感じている。もっとも、迷い犬や迷い猫を児童館に連れて来る子がいたり、用水路で、全裸で泳いでいる子がいると、「おめさん所の子だろ」と電話が掛かって来たりする等、よろず承り所にもなり、その度に飼い主を捜したり、バスタオルを持っ

て用水路に走ったりと、思いがけない業務が増えてもいるが、地域との関わりの中で煩わしさも引き受けるのが当然だと思っている。

また、初回の時、小中川避難所は特に何の名称も無い避難所であったが、その活動後しばらくして「第3次避難所」と指定され、さらに間を置いてから「予備避難所」の指定となった。現在は外壁に「予備避難所」とのプレートも設置され、地域の人に周知されている。予備避難所なので、災害が起こった際、最初に開設される避難所としては扱われない。配慮が必要な家庭に特化してみてもどうか、という私たちからの提案を一步受け入れてもらった形となった。

③情報が届かない人にも手を差し伸べる。

（「避難所生活を体験しよう! VOL. 3」）

2回の疑似避難所生活を体験する中で、この地区にとって次に必要な活動は何かと考えた時、ピンポイントでおかあさんが外国から来た家庭を支援したいと思った。小中川地区には、インドネシア、タイ、アメリカ、中国、フィリピン等から来たおかあさんが住んでいる。出身国の料理を作ってもらう等、多文化理解の活動も盛んに行ってきたが、災害時対応に限定するとまだ足りない部分があるような気がした。

初回の協働相手であった李仁鉄さんと振り返り活動をした時、「日本語がある程度理解できるようになった人でも、『直ちに高台に避難してください』という行政無線をどの程度理解できるか疑問です」と言われた。直ちにという言葉回しは、日常生活では叱責される場合くらいしか使わない。さらに、「高台」という単語は、不動産物件購入時くらいしか使わない。しかし、「大勢の人に少しでも早く誤解無く伝えるには適切な言い回しです」とも指摘された。極少数の外国から来て日本語が不自由な人のために「少しでも早く高い所に逃げましょう」と言い換えるのも、切迫感が伝わらず、行政無線としては機能的ではない。かといって、外国から来たおかあさんがいる家庭には避難情報が伝わらなくても構わない、というのも片手落ちだと思う。その間を埋めるのが児童館の活動であろう。

また、予備避難所である小中川児童館には、緊急電話があり、災害時避難所になった場合、国際電話も無料で掛けられるのだが、それは全く地域で知られていなかったのも、それを情宣する活動も行った。どんどこプロジェクトとして申請し、「NPO法人 ふるさと未来創造堂」を協働相手とすることになった。

実際の活動は、平成29年11月25日に行った。活動の一端として、小中川児童館は第一次設置ではない、予備避難所であることから、ここが避難所として設置されたことを知らせるポスターを作ってもらった。フィリピン人のおかあさんがいる班には、ローマ字あるいは英語での表示を密かに期待していた。出来上がったものはそれ以上であった。ポスターの中には「free」の文字があった。フリー、つまり無料であることは、ポスターで言うべき大事なポイントなのだ。これには、協働相手のふるさと未来創造堂さんも驚いていた。災害時の活動をやっている方でさえも、無料がポイントとは思わなかったのだ。日本人であれば、避難所に無料で行けるのは当たり前前の事だが、外国から来た方は、いくらかかるかわからないので、怖くて避難所に行けないという気持ちがあるのだとわかった。

また、実際の避難所では、小学生の子ども達が優秀な通訳となることもわかった。子どもが児童クラブに所属していることから、日頃からお迎え等で児童館に来る機会があるフィリピン人のおかあさんののだが、パッキング等、やったことの無い調理の説明は皆と一緒に聞いても良くわからない様子だった。子どもたちは、「賽の目に切る」を「小さく、小さく切る」に。「袋の中の空気を抜く」を「(空気を指で指しながら) このぷよぷよを全部追い出す」に言い換えていた。普段使わない言い回しを避けて、即座におかあさんに理解できる言い回しを使った。災害時、小学生は、母への通訳となれるのだと思う。

さらに、別件であるが、参加した子どもたちが、全く電話を掛けられないことが判明した。緊急電話はスマホと違いナンバーを押さないで

通話できないのだが、それをやってみたことが無い子がほとんどだった。そもそも、受話器を上げて通話音を確認してからナンバーを押すということを知らず、自宅に電話が無い子になると受話器さえ上げなかった。監禁等で逃げた子が公衆電話から助けを求めた事例もあり、いざという時、電話を掛けられるよう、今後、それを入れたプログラムを行い、子どもが助けを求める力を養わないとダメだと気付いた。この点に関しては、ふるさと未来創造堂さんも「今後、公衆電話の掛け方を防災プログラムに入れたいくらい危機感を感じました」とのことであった。

5. 避難所として普段からやっておくべきこと

3回の疑似避難所体験活動を通じて、地域の子どもたちに、災害があったら児童館に逃げて来ることと、地域の大人たちに、子どもが遊んでいる時間に災害があった場合、安否を確認するには、児童館に問い合わせをすれば良い、ということが、少しずつ浸透できたと思う。一方、実際に子どもたちが避難して来た場合、受け入れ態勢は大丈夫か、との問題が出てきた。特に、台風19号の避難勧告を受け、私たちは、日頃から準備するものを整えることを考え始めた。二つの児童クラブを併設している小中川児童館は、今年度、117名の在籍児童である。それ以外にサークル活動の時など40名近くの自由来館児が集まる。そして、子どもが一番集まるピーク時の職員は12人となる。欠席者がいたとしても、通常で150人程度の受け入れを想定しなければならない。まつりやダンスフェスティバルといった集客の多い活動時に被災すると200人以上の人がいる。現在の体制で対応しきれんのか。

しかし、対策を考える前に、そもそも小中川児童館の水害の危険度はどのようなものなのだろうか。台風19号までは、地震による災害ばかりだったので、水害想定はきちんとしておらず、職員の知識も足りないことに気付いた。そこで、台風19号が去った後の10月20日児童研

修館「こどもの森」で行われていた「防災活動 コドモリからの挑戦状 防災編」に活動支援として加わった。その際、燕市の防災課の職員から、改めて台風19号がいかに危ない状況だったかということと、ハザードマップの見方をきちんと教わった。それによるとこどもの森は自然堤防の上にあるし、災害時水を溜める役割のある大きな駐車場が隣接しているので、水没する危険が低いのに対し、小中川児童館は信濃川の支流に当たる中ノ口川に近く、決壊した場合、1階は水没する可能性があると言う。今回の分水地区で、2階避難があったことを考えると、現在、食料や水の備蓄を2階に置いておくのは正しいと言える。また、小中川児童館は児童クラブを併設していることから、大量のおやつ用の菓子を常備している。今までも地震の想定はしてきたが、今回の水害を鑑み、決壊し、ボートでの救出まで持ちこたえる体制を整えることが必要だと考えた。菓子については、常にある程度備蓄しておくこと、食物アレルギー児童に配慮し、27品目除去の菓子をとぎらせずに保管すること。何より、ローリングストックの考え方で常に古い物から食べ、新しい物を奥に入れるよう徹底することなど、対策を講じた。棚一杯の菓子を見ていると、何かあっても全員にカロリーのある物を食べさせられると思う。また、冷蔵庫に必ず水がストックしてある。毎日、前日入れた冷えた水を子どもたちの到着に合わせて出し、冷たい水が飲みたい子が飲めるようにし、同時に常に新しい水が保管されるように気を配っている。さらに、卓上コンロを熱源と共に常備している。救助が来るまで3日間は何とか持ちこたえられる体制は整っている。

一方、職員の訓練や研修はどうであろうか。防災活動は、広域対応の活動となることから実施する児童館だけでなく、市内の他の児童館にも参加を呼びかけ、活動支援をしながら体験を共にしたい。児童館同士の連携を密にすることで、より幅の広い活動を経験できる。今後は、よりそれぞれの児童館の施設の特性や職員の専門性を十分に考慮した防災活動をしていきたい

と思う。館長が食育指導士であるこどもの森は、アレルギー児童にも対応できる避難所での食事を提案する活動を行っている。同様に、異文化理解講座を実施している小中川児童館で、外国人のおかあさんも一緒に避難所生活を体験したのも、児童館特性を活かしたプログラムだと思う。こういったそれぞれの児童館の持つ専門性を活動支援の中で生かしていきたい。

さらに、私が、釜石の避難の際、特に素晴らしいと思ったのは、最初に避難した福祉施設の周辺で崖崩れが起きているのを見た中学生が、より高台の施設に逃げることを提案した点である。私たちも自分で考えて行動できる子どもたちを育てて行きたいと思う。釜石で8年かけた活動で成果を出したことを励みに、小中川でも、避難所生活体験を、繰り返し何度でもずっと実施していきたいと思う。

6. おわりに

実際に、小中川児童館が予備避難所として開設される場合は、児童クラブ併設の児童館なので子ども向けの遊具や本が揃っていたり、調度品が子どもサイズだったりという施設の特性を考えて、乳幼児連れの親子が一時避難所として使う可能性が一番高いのではないかと思っていた。災害があり、公民館や学校に避難所が開設され、そこで居心地の悪い思いをする被災者を受け入れる場所になるのだと漠然と考えていた。

しかし、今回の台風19号は、燕市で避難勧告を出す事態で、今までの災害とは身近度数が全く違った。同僚の自宅が流されるかもしれない、という状態だった。今後は、予備避難所を開設する時間の余裕すらなく、水に追われ、子どもたちや地域の人が、児童館の2階に逃げ込む事態も想定しつつ対応を考えなければなかった。そして、そのためには今まで私たちがやってきた活動を見直し、何が十分で何が足りず、今後どのような活動をすれば子どもの命を守れるか、総括したいと思った。

子どもたち自身が自立し、自分の命が守れる行動を取れるよう、普段から意図的に訓練する

ことと、施設のハード面、ソフト面で災害時に
対応できるように準備しておくこと。どちらが
欠けても子どもの命は守れない。災害は来ない
に越したことは無いが、万一来た場合でも、小
中川児童館があったおかげで命が助かったとい
う活動をこれからも続けていきたいと思う。